

氏 名 山内 栄子
授与した学位 博士
専門分野の名称 博士(保健学)
学位授与番号 乙第 4401 号
学位授与の日付 平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件 保健学研究科 保健学専攻
(学位規則第 5 条第 2 項該当)

学位論文題目 喉頭全摘術を受ける頭頸部がん患者の術前から退院後 1 年間の他者とのコミュニケーションを通じたコミュニケーション方法の再構築過程

論文審査委員 小田 慈、西田 眞壽美、岡本 玲子

学位論文内容の要旨

本研究の目的は、喉頭摘出者の術前から退院後 1 年間の他者とのコミュニケーションを通じたコミュニケーション方法の再構築過程を明らかにし、その過程を支援する看護実践への示唆を得ることである。対象は喉頭全摘術を受ける頭頸部がん患者 12 名で、術前から退院後 1 年間に亘って参加観察及び半構成的面接を行い修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、喉頭摘出者の他者とのコミュニケーションを通じたコミュニケーション方法再構築過程は、『伝わらないことによって膨張化した欲求不満状態からの脱却化』を図る過程であった。この過程は、失声の予告が引き起こした〈声を失うことのイメージ化〉及び【命と声の引き換え】の覚悟を持ち【喉頭発声機能喪失下での伝達の再適正化・再円滑化・効率化】を目指すことから始まり、術後の【相手を見て・合わせて・ひたすら伝える】ことを起点に生じた 3 つのサイクル、すなわちさらなる【喉頭発声機能喪失下での伝達の再適正化・再円滑化・効率化】を図るサイクル、【伝わらない伝えられない・話せない話さないことへの欲求不満の膨張化】を引き起こすサイクル、(人とのコミュニケーションを楽しむ) 及び【極限までに縮小化されたコミュニケーションからのわずかな拡充化】を図るサイクル、及び【伝わらない伝えられない・話せない話さないことへの欲求不満の膨張化】を起点に【命と声の引き換え】の覚悟を想起するサイクル、の計 4 つのサイクルが相互に連動して循環する中で患者は〈欲を出す〉ようになり、その欲を原動力としてさらなる【極限までに縮小化されたコミュニケーションからのわずかな拡充化】を図り、それがまた 4 つのサイクルを動かしていくという循環型の過程であった。患者自身が自然に〈欲を出す〉まで待ち続けその時の到来を見逃さないこと、〈欲を出す〉までに患者及び周囲の人が体験する苦悩を緩和すること、という看護実践の必要性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、喉頭摘出者の術前から退院後1年間の他者とのコミュニケーションを通じたコミュニケーション方法の再構築過程を明らかにし、その過程を支援する看護実践への示唆を得ることを目的として、喉頭全摘術を受ける頭頸部がん患者12名を対象に、術前から退院後1年間にわたって参加観察および半構成的面接を行い修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析したものである。研究手法は堅実であり、研究結果に至る論理の展開にも飛躍は見られず、妥当な結論に結びついていると思われる。一方、「コミュニケーション」に既に他者との情報のやりとりという含意があるにもかかわらず、これにさらに「他者との」という形容を加えるなど、キーとなる概念の定義が不安定である。また喉頭摘出による失声とその後のコミュニケーション能力の再獲得というテーマはこれまでも多くの報告があり、それらの先行研究と比べて、本研究がどのような新知見を加えたのかがそれほど明確となっていない点にやや不満が残るものの、概ね原著論文としての水準を超えているものと考えられた。

本論文は、喉頭摘出者のコミュニケーション方法の再構築過程を明らかにし、臨床に資する新たなエビデンスを提供したことにより、博士の学位に値すると判断された。